別8
20

石川啄木

暇ナ時

—歌稿ノート—

八木書店刊

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

別 8
20

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20
ガラス使用

911.168
I632h
518-20

暇ナ時

歌稿ノート

国立国会
31.11.21
図書館

U 52728

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

△いづら行くし君とおかまを北枕の
れの岩に剥まむとゆてし(又)

こいや立て去明日を思ふ为を擦て
かく柏抱くし標疑ろ石

○△熱はつちかで勝つではず一粒の砂を手にし
し人を忘れず(又)

△血を欠すは飲くをしらざる歓の中
性をもて神を崇めむ(又)

△みんなの深さをしらず千斧の鉄の鏡を
つと投げてみる(又)

△空手ば雲に築れる大山を砕かむとし
て我は斧研ぐ(又)

△今ゆもまそ何處ゆしらむ我かな漂泊
ゆくも飽かるを知らず

△寄り来し人をいたわ何處にてさは云ひ
き話さて来めつ(又)

・うら悲し青き嘆きをしとりし病者はかの
青空にあこがれて死す

○△わが魂の底に涙を一人胸にかくれて
溜りと泣く(又)

○△限りなく続く野の灰色の壁に面し
て我一人泣く(又)

△若き日を暮らすの日は来ぬヒマラヤの峰
雪に赤き旗立てん(又)

△千人の山女を入れし蔵の扉に我はいねもす
青き塗る(又)

・千年の眠り一気に鳴る山上の鐘のいかりに
おどろきて死す

・夜の街娼とわかぬを人の恋の嫌夫
ぞ彼方来る

・判官よこの女の肉は女はいまだ恋知らず
赦せと叫ぶ若き弁護士

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20
ガラス使用

52728

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

B

君が名を仄かによびて涙せし幼 高の君子

手のはかへりあたはず(十)

るまたし

、憂きすの数にあるか殺る今君みて
かくは泣くと泣く人(十)

故さとの君が垣根の恵条の風をてす
れて六年経にけり(メ)

、君などが一日笑はおひそかすも思ふ
事あり妻等を惹る

(五十五首)

(以下 昔日千曲 千前 五十首)

、君が名を七度よべばありとある国
内の鐘の一時に鳴る

、天外に一鳥とべり辛うじて君より
遅れ我は野を走す

、我が母の腹に入るとき我嘗て事
ひし子を今日初見出でぬ

(ロ)

、たゞ一目見えて去りたる彗星の跡を追
ふとて君を踏みけり(メ)

が足ふむ

身がまへて我ははつたと睨まへぬ誰ぞ
息面して人を脅すは(メ)

もろともに死なむといふを卻けぬ心や
すけき一時を欲り(メ)

、野にさそひ眠るをまちて南風に君をや
かむと火の石をきる(メ)

、東海の小島の磯の白砂に我泣きぬ
れて蟹と戯る(メ)

、青草の床巾はるかる天空の日の蝕
を見て我が雲雀病む

、待て此来ず約をかまさる女皆を殺すと立てる
喚くとき君は来ぬ(メ)

、水晶の宮のぬくに百本の玻璃石をつみ
かおしれぬ
爆弾を投ぐ(メ)

、百万の屋根を一気に拡つ不す大いなる
足頭上に来る（×）

、君に逢はず森を出でむと豹よりも大なる
蜘蛛の網にかかれる（×）

、風すでし枝に軽ぎり老木の概試みに
一葉を投ぐ（×）

、「工人よ何をつくるや」「重くして持つ
べからざる鉄槌を鍛つ」（×）

、かなかしに艤装終れる船は今船渠を
出でて海底に入る

、風樣にみち人々は雷を持けどもいまだ
山雨来らず（×）

、我掃る明日枯れたる大木の根にぞ見
出でし一寸の穴（×）

、兵事にみて俺むを知らざる少女子は
早くも我に俺まれけるかな（×）

、誰ぞ雲の上より高く名をよびて
我が酣醉を破れるものは（×）

、我君をもかさむかくぞ鍛れ
日よりぞ君は我を怖れず（×）

一陣の風凡を呼びて間安の使者をつか
はす恙あらずや

、我時に天井にある節穴の目ににら
まれて眠る能はず

、恒然として前に行く我を見て我が
影も亦痛（うな）変れて行し（×）

、己が友はいたく煙苔十をたしめども
銭の無き日は仮寝ぞする

、我未だ（おのがこを食ふ）牛を見ず、又見ず
我を（雲でぬ）女を（×）

、その時に雷の様なる洪（哄）笑を頭上
に聞いて首をちぢめぬ（×）

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

一線の上に少女と若人と逢ひて百年動かむとせず

わが父は何に怒るや大いなる青磁の瓶を石上に撃つ

日一日老々をゆきつくし遂にも逢はず死せる我が兒に

祭壇の前にともせる七燭のその一燭は黒き燭燭

わが若き日を葬りて立てにたる碣を白き夜も君は抱きぬ

今日九月九日の夜の九時をうつ鐘を合圖に我は火を焚く

ああその夜家内の燈ひととひとの語えてわが母病みそめし夜よ

裴姆着し女はとへど物いはず火中に投げぬ鮮血の指

血紅の青薔薇

幼き日いたくも我は怖れにき聞くことなき叔父の片目を

その群にふと足袋一つ穿ける人あるを見出でて我は驚きてさらぬ

いと長き鼻と指なき手をもてるその老人に今日いあいにき

わが女空ゆく鳥の影見はつつたいしほしくと眼に死にてありにき

何ものか鉅き音して泡立ちぬ夜秘して醸せる酒の面は

鉄壁を撃ちて断く頂上に上れる時に日は暮れにけり

いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出でし白き骨共

大空の一片をとり試みに透せど中に星を見出でず

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

、七人の隠者一ぬ上森を出て市に
来ると城門を閉づ

鬼 ○風や藍色の血にまみれたる
森の風鋼鉄の色の蒸氣船の鬼大木
をゆるがして泣く

、すさまじく山なり(どよ)み既にして一葉
落つる音だにもせず

だだ一歩ひれあやまりて
ひれ半歩たたる半歩をあやまりて遅
れたる時為に半歩勝つことを得ず
生涯 まるゆもなし

戸 ○我君は[illegible]と入れる宇宙の[illegible]に[illegible]
あ[illegible]

戸 ○夏の風入れむとあけし能の戸ゆ君つと入り
てむでむともせず

、茫然として見送りぬ天上をゆく一列の
白き雲の影

[illegible]

床のつると文机の鉄いろいろの城壁
きづき君を防ぎぬ

跳 ○わが病める心の野も黒髪の鞭をおと
水て跳らむとする

人妻 ○沓然と黄昏れて来ぬ夕の時につと我
敷る君は人妻、

(うす紅き煙あがれり夜の空遠き
都の地平の上に

跳 ○とみてわが馬は跳れり千人の少女の
環よりつと君の出づ

筋 ○われ顔に大き筋たていぎたなし君
を罵る[illegible]まで上愛せり

(熱々と百千万の屋敷まづ鳴れり我も
を命を下さず

白馬にまたがりてゆく赤鬼の鉄兵士
宣も恋せしあはれ

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

六月三日　雨

「風のことどうへ かたなきい少女
子の心を射むとこゝろをとう（メ）

三百の工人は皆血を吐きぬ 大笑熱
のこす後の一夕

火をつくる大エンゼンのかそはらな
き男かは動き

大木のこゝをろうして勉ひたる三百の人は
深く眠れり

われひねもす街角に立て信號の旗を
ふれども汽車は来らず

大木をねこおてふける暴風のや
やしづまりて始ら眠り

今宵の何處かにて逢ひしことあるねを
りと我を呼く

「天国のやうなる国へ行かむとて
我らをかくさまよひてあり

「何故に涙くや」老ぬ「その恵のまこ
となるめを恥ちて我泣く」

「すでにして我まを多き思出のほの
「人を思出るみち

「秋日の靴の白面会その中の一騎共
し我は駆む

「その借りて去る迅さぬその人の娘
み似たり我は逃げにき

「三つの窓とその何れよ見ゆるやと
その眼ひまなし墻をかくれて

衛工場日もひし物のかすしをも
らべて見

「いとけなき日の我文は今も病しそ
しき如く我を物言ふ

「初めよりこのそなうしものあ
る砂山を見ては悔つ

国立国会図書館　タイトル『暇十時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

濱薔薇（ハマナス）

「己が友は北の濱辺の砂山の濱茄子の根に死にてあるにき

「九十九里つづける濱の白砂に一滴の血を印さむと行く

「女らよ我所ひにけり衣みなすてて踏らむいかに歌ふや

「やよ柱力角せむやといひて汗出るまで拙せど動かず

「昨日より色の変れる紫陽花の瓶をへだてて二人語らず

「柱みな逆柱（さかばしら）なる家建てて二人住めども何事もなし

「饒舌の人よりのがれ歌はざる花に對へどいまだ足らはず

かの人とかの人くらべ迷ふ時来り志故に君をとりにき

「彙せし曲れる人と髪赤き人に恋は水て泣きて怒りぬ

「らうがはし我をとりまき争ひぬ歌ふことなき女子の群

「しかはあれ我この君を忘れむと謀れる夜にも文を書きにき

「それゆゑに我なほかくも老いざりと数々の名をいひてほこれる

「それ切に切にねがへり遠方にはなれて思ふ所なる恋 名のみ知る

「のこすことなくもろ〳〵のたのしみを貪らむとて 倉もかく生く

「人をこふこと恋をすること七夜にあまれども これは忘れず中の一人も

「しかすがにかくいつはらず いつはらずかく我いふを聞き怖るる人のあるを歌はず

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

かの人の佇ちて淀まれたる朴と我の倚る木

それ知らず君泣きし朴と我が倚る木といづれ古きや

逢ひてゐはゐて見ぬ人の如し ゆす罌粟を摘む十二許りの女子とゆく

君とわが心照とり水晶の盤に鈴らべて冷水を盛る

来る毎に採りて来し花を持て来ず(又)る日はいささかに君を疎んず

心して聞けば何れも何事か意味ある如き君がたわ言

いづこまで逃ぐ心の紙を追ひてくる手のみ大なる膝行の媼

わが瘦せつ蒲団たちまち石となり手限み痩し動くあたはず

七歳にして君早く白多き花よりも桜一輪の赤き椿

わが宿の隣の窓も今はまたよき袖見と妹が笛吹き捨てけり

「何故に君は我心を裂かやし」「君を恋せぬ前も恋ふゆゑ」

夜の路天より高き一艘の入道ありて大跨ぎ来つ

男の毎み我は世に来て十七にもなりて

三年前一夜交して遊りでとなりし人を見て今も逃ぐ

女なき国に住まむと行く群に交りて三日一人帰り来

饑その人何故かさのみ物いはずなりしを怖れて帰る

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

君とかく對ふのみ辛ろして酒を忘ると大き遊す(十)

愚かなるいと愚かなる雨よと我た[illegible]涙のでひぬ

室の木の七本揺れし一本ゆらがず地に座して涵す

日く小方まづきらめける星一つ見てかく遠く来しを驚く

少女子を狩りにゆかむと立つ七き母に かならず見たる小さき鏡よ

[illegible]あかき筆もて我が歌を消しなまし [illegible]一手腕に入る

限りなく情なしきものことにあり 避けよと呼びて君が手をとる

作日まで胸の十字をきまりし指 その指もて[illegible]君を指す(十)

我君に追はると知りて同じ路毎に逃げて十餘日経ぬ

いつはりの声を交へぬ言葉もてただ一言をいはれと願ふ

四度名をよべど答へず[illegible]怒りける日よ かく名ぬ日まで答へずてあれ

わかわかよる帽子の庇大空を覆ひて(土) 室[illegible]志声ぞ

炎天の下わがかげを大いなる沓たたく一つ牛の如く行く(十)

知る人の數尽く眺めて旅きえざるもの一つあり

とんとんとまたとんとんと聞きしことなき音壁に伝はりてくる

いと黒き壁の面に白點をうちち 眺め終日

方形の石に対角線を書き其交点を針をもて堀る

室の隅四隅に四つの石を置き中に座りて石をかぞへぬ

永遠に轉ぶことなき獨楽を我つくらむとして大木を伐る

大木の枝ことごとくきりすてし後の姿の寂しきかなや

雨の夜あまり繁くて数へむとすれど能はず軒の玉滴

のてりたる三升の米とりいでて其三粒を佛前に置く

裸足なる乞丐の爺に物こはれ一つの皆を泣きて與へぬ

たくひなき暑さ来れり午后二時に寒暖計は破裂して落つ

永しへに鳴りてやまざる音楽を聞けと時計を掛していふ

一盞をのみ干す毎に指を噛み血の一滴を盃にさす

まてど〳〵尽くることなき葬りの無言の列ぞわが前を過ぐ

目ぞ暈り日月を見ぬこと既に八千餘日死なむともせず

巡査者て怪しと我をひきゆきぬ君が家あたり組織するをば

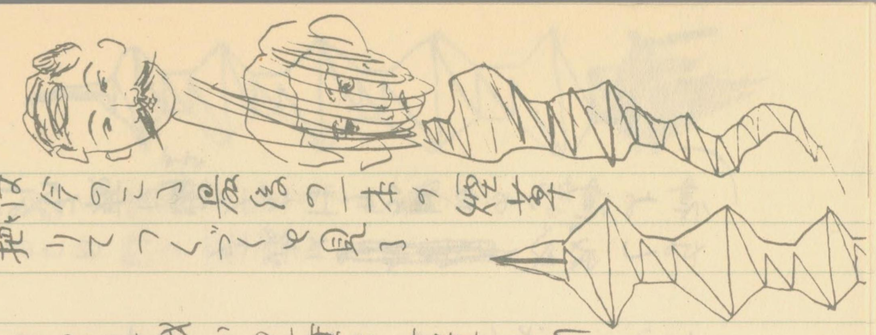
「檢非違使よなどかく我を縛せるや」汝心に三度蕩しぬ

よしさらば汝の獄にそのサ女共に置かむと云へわが判事

試みに赤き墨汁と鑷を前にならべぬ

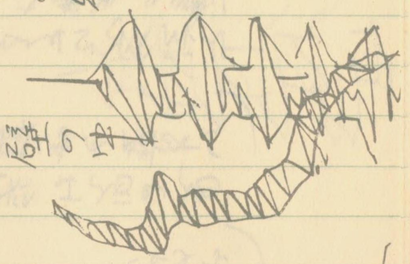
繪具の皿と我が血糊の皿を前にならべぬ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

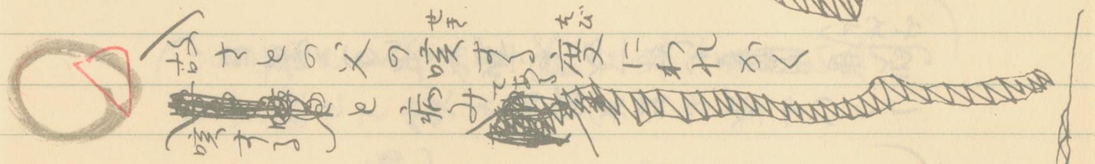


我は今のこの座位の一本の姿勢を把りてつくづくと見る

ぬかしてまた我が生涯の一息の前の中の一齣をおく

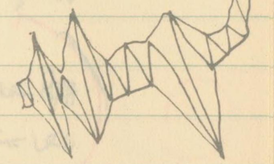


灯ともす頃さまよう父と母壁の中

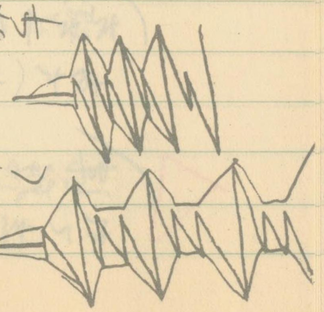


ふさとの父の寝すがたにわれかく

われを抱きて裏おもての父に



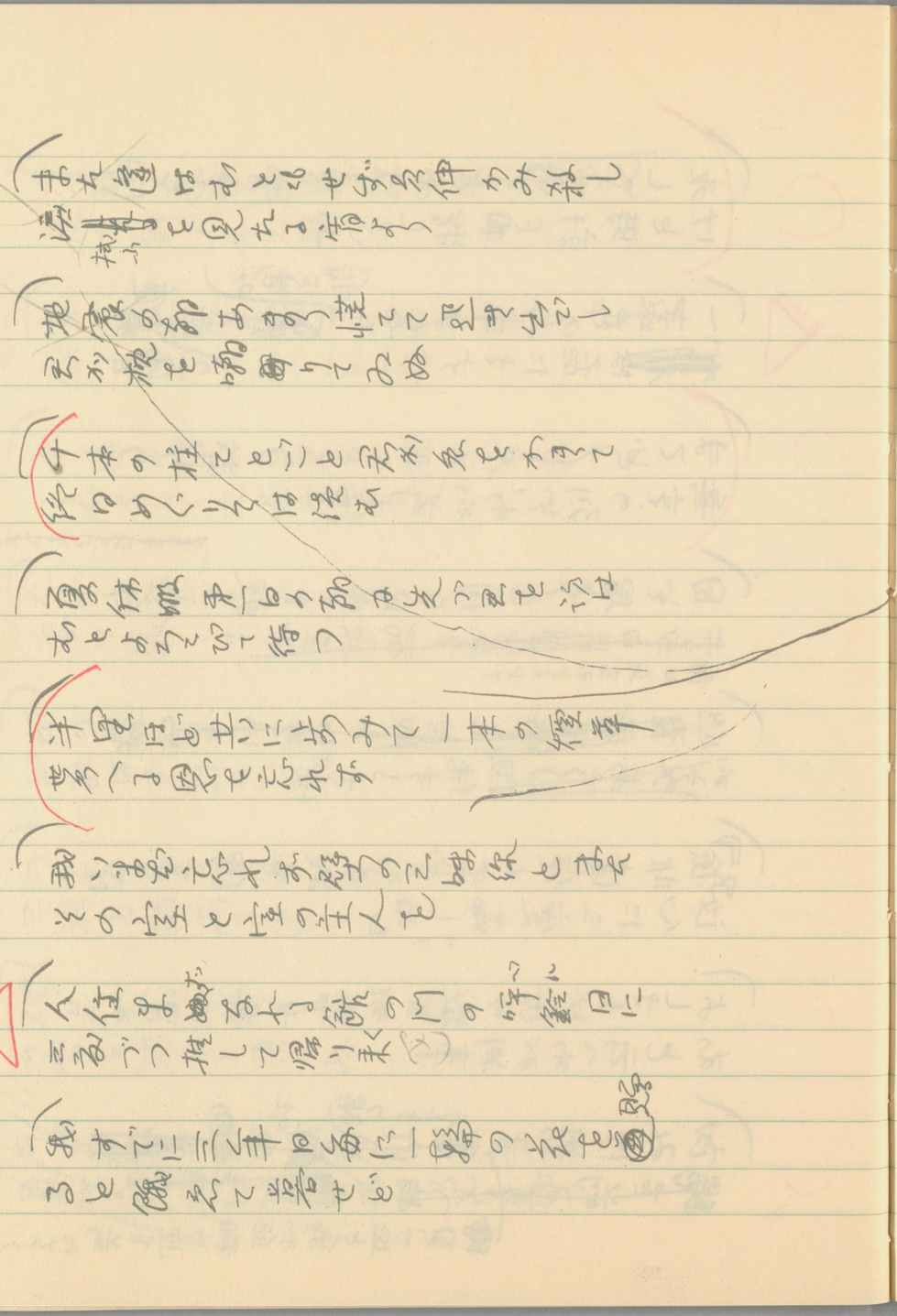
父とのあるしおせつなみぬをばがうとおもてをとう



兄よといわれ我ながらなれなれしさのみ

父のおもほさう漫画にかく

狂ほしかなる



遠山に日の当たりたる夕かな

雪ふかき夜の灯ともしごろを

おもよろこびて待つ

雪ふかき夜の灯ともしごろを

父が使ひ物買ひて来しを

我いまもたれおる炉ぶちに

父と母の主人とを

人住まぬ家ぞおもしろき

ますでに三年の余に一部の文を

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

神よ神この日ばかりはただ爾(なれ)に頼む外なし我(あ)児は病す

一髪の危機今去りて児は生くとかける文みて泣笑ひする

いと重くやみて癒せぬと文よめど蔦る見る児は笑みて癒せざる

やめる児(あ)の一心に癒さむとて男ましくいふ君にまた泣く

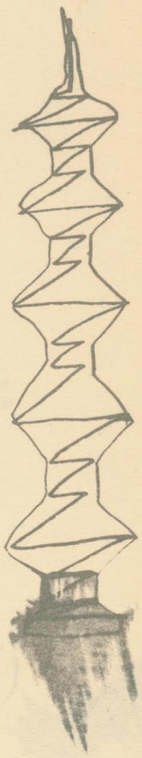
重く病むその児の母よ君もまた生れざりける世をば悪ふるや

妻と子と父と母とは各々に手ランプをもて暗中を来る

ただ一つ家して住まむ才能を我にあたへぬ神を罵る

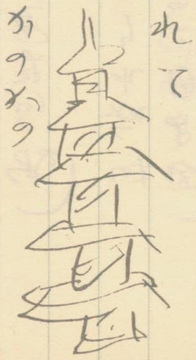
津軽の海その岸北と都とに別れて泣ける父と母と子(メ)

飄然と家を出でては飄然と帰りたること既に五度(メ)



我時々見知らぬものに強はれて曠野の中に捨てられて泣く

何日の年何日の時にか我はかの青空にとぶことを得む



いと高くとぶかの影を挽へむとひねもす馳せて家に帰らず

今日却に猫をさなくて故さとの寺にありける日を悪ふるかな

我(れ)父の怒りをうけて声高く父を罵り泣ける日思ふ

母これを見うたず冥なる妹をうちて慰せし日もありしかな

赤手もてかの王城の城門をひらかむとすと腕はさすれど

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

「われ人にとはれし時にふと母の齢を忘れて涙ぐみにき」

「母よ母このひとり児は今も病乳の味知れり飯忘て寝るな」

「我いまだ髪を生やさぬ[illegible]そのうちに老いたる親をかなしみて泣く」

「我が母は今日も我より送るべき為替を待ちて門に立つらむ」

「百二百さるはした金何かあるかくいふ我を信ずや母」

「たはむれに母を背負ひてその餘り軽きに泣きて三歩あるかず」

「われいまだわが泣く顔をわが母に見せし事なし故にかなしき」

「何事も世に元言はず妻よただ炊ぎてあれな三合の米」

「われ今日も不倶戴天の敵を見て剣を抜かず老いたる母よ」

「わが父は六十にして家をもて師僧の許に着経ぞする」

「夏来れど袷をぬがぬ人々は我と来て泣け夜の明くるまで」

「あたたかき飯を子に盛り古飯に湯をかけ給ふ母の白髪」

「己が家に安けき寝をゆるさざる国に生れて反逆もせず」

「母君の泣くを見ぬ日は我ひとり泣き[illegible]の夏」

「今日は汝が生れし日ぞと[illegible]わが膳の上に飾せたる一合の酒」

「若しも我霞西亜に入りて反乱に死なむといふも誰か咎めむ」

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

君よ君我よく知れり一銭の値と蕪(すづ)と涙とう
味(×)

かなしみて破らずといふ新会よき事を
知らざる愚直の男

父と我無言のままに我の夜中を並
びて行きし故郷の路

やや老いて父の怒らずなりし頃我れ
わが君を思ひそめてき

女なる君そこに紅き叛旗をば手づか
ら縫ひて我に賜べよ

君にして男なりせば大都会
は焼けてあらけむ

己が父が蠟燭をもて蚊をやくと一夜
寝ざりしこと蕪となれ

天に問ふ今もし一人我しなば己が父母を
いかにかはする
夏すらや

父母は老いていませり あはれ蚊よ
来て我の痩脛を繋せ

大音に泣くをえなさず 今日も猫
日記を背負へ流離の人よ
子かな

己が母の死ぬ日一日美き衣を着
むと願へりゆるし給ふや

猛然として我れ父母の名を念じ敵
を追へども大帰り来ぬ
やがて

かく弱き我を生かさず殺さざる姿
も見せぬ残忍の敵

宰相よ心して行け いつか我狂せ
む時のなしと誓はず

二十五日 以上五四十四首

国立国会図書館 タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』 請求記号 本別8-20
ガラス使用

六月二十六日

こころよく泣くは優れる喜びを知らずと黙しやがて祝明けぬ

一食の麺麭をさくにも天にます神よと呼べる人を笑はず

明けてかたたし暮れしをも猶神恩に帰して寝にけることただ一夜

ふと深き忍怖おぼえて今日我は泣かず笑はず窓をひらかず(メ)

惜然として街をゆく人我の外に猶ありて泣きてかつりぬ

ものみなるみな尽く一つづつ眼ありて我をつくづくとみる

はてもなき高さにありてつねに〳〵涙たたへし大いなる眼よ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

なしと知るものに向ひて大声に
祈らむとする稚はかなしき
一葉の葉書を君の入れたるを
見しより愛す角のポストよ
夜の家に入りて出でざる三人の
少女をもちて我にぐ
（の下駄）
筑紫なる下り（サガ）松濱その濱の
石ことごとく数へつくせよ
君があとわれ大声に東歌うたひて
ゆけどふりむきもせず
たはむれに君が名かきて其上に
おだせぬ恋の部と朱書する
われすでに日にいくたりの少女みて恋
しあたはず泫然と泣く
『何を見てさはをののくや』『大いなる牛
流眄に我を見てゆく』

かず知れぬ冷笑（えし）の矢を放ちつつ
君があしあと踏みて我ゆく
茫然と佇む時に手を出して我を
抱けるおそろしき状
あやまりて手とりし咎に夜をひ
と夜いかれる君は我を帰さず

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

六月二十七日

我立てり東隅の水満ちも近きひ
たせつ山の頂

その時は見ゆることなき大いなる
手ありて我に力をへにき(×)

見ることもなく私も知らぬ一茎の草
を見出でて涙とまらず

蕪の寝みな尽く大空をうつすと雨
みぬかるみを行く(×)

かし細きかよわき草の茎よさへ受
きてあらけり一陣の花(×)

黒柿の針の穴より我欲く見ゆるし
のみな美しきかな

(以上のうち△印は前回七回の記載)

おそろしきかを以て~~屋根は~~ 沙汰
来る屋根をまくて柱動かず
ひゝあらず

~~屋根は屋根沙の下は濡て三日かの~~
~~大雨の間を私は蓬~~ し

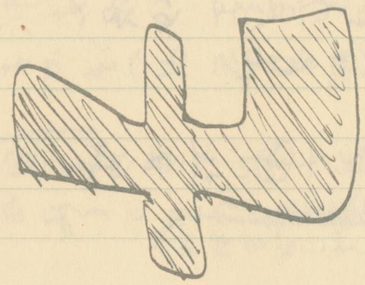
すではしてかの苗子屋の前は出で
ぬ手をに握らず別れて帰る

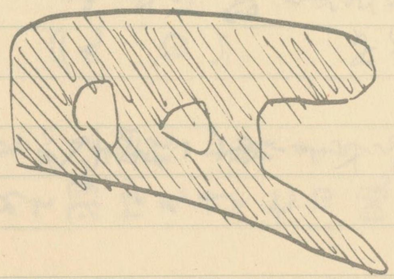
その時は雨ちらで始めれ一人かの
昔柿の糸わけて来ぬ

われ屋根と大木の枝とかの空と三重
の話きて安く眠らず(×)

~~[illegible]~~

大いなるいと大いなる思ひ(その)
をつかしてこらえりてゆく





国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

（四日 森先生の傳るこの作り）

・[illegible]日に[illegible]ことなる色の声を かぞへ
行けど猶見あれ 秋葉の声を

△・しまだの[illegible]を[illegible]て 大[illegible]を
[illegible]

[illegible]

・今日だけは 聞くことなく 路はたの
藏の声を見てに 沛れぬ

△・大海を 跳れて 青き大き 奥の 鏡の
年のこのうを 思ふ

△・すでるして 鉛が 天地を 一すぢの 鏡の
き 君が 光を 知れぬ

森の中 思ふ木を ゆるがして 何を
喰ひ 風の 吹く

（七日）

△・沖を 中に 一つ一つの 帆を かぞへ 鉄
を かぞへ 鉄を 知れども

△・回を 一ぢ 沢の 鏡の 鏡 けさの 心地
[illegible]

何しかも 鉄に 鉄に 鳴り 鳴りは
[illegible]

（九日）

・[illegible]
[illegible]

・[illegible]
[illegible]

△・[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20　ガラス使用

、故もなく笑みぞ洩れつる驚き
てあたり見廻しやや安んず

、おなじ街ゆきかへりして（ゆきぶりのその）四家目に
笑みし人はも

、ぼうと吹く船の篠笛は三方の
山にこだまし鯉が上におつ

つねにわれ訴ふゆゑるいとおき鯉
汝がいつはりし責むる術なし

、その言葉皆疑ひて病我を愛し給
ふを疑はずあり

「何故に手をばとらざる」「見よそこ
を己が亡き父に肖し人ぞゆく」

、あでに笑み手とりて来る少女子の二
人の中につとわけて入る

、われ時に君を救して国境に逃げ（な）
とまでに毛事をいかれり（しき）（にいかりて）

口すてしまきて投たるを見たる
よう踊みそめるし君をつげえず

（十日）

ただ白く白くふるへて立ちのぼる
ほそき煙も大空にゆく

△、淘然に酔ひつる人と淘然と酔ひ
つる人とあるしのみなり

△、ものみなの外の一つをつくるてふ母
のねがひに生れたれども（×）

神の山獣の山のその峡にいとう
づたかし恋の屍

（十一日）

、高空の雲にしちらば鄭にけに汝
が家の上を動かさらまし

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

、今日もかくはたや明日またかくあらむ
我は倦みにきすれば君にも

、わが涙いまだ干なくに思出は君より
君は首ざるふにゆく

籠の鳥ふとなきやみぬ驚きて怖れ
て君が手より離る

朝霧のほのゝなりゆく思出をす
れはやかなし老の迫るや

、なびき捜しわが黒髪の落髪にま
じる白髪よくみればうし

△、七人のその一人をも忘れざる今日を
よしともかなしとも見る

△、唖みかふめさせどきかず捜むといふ
推びたるを愛でて手捜ける

、ものの恨む若きひとみのうるほひに見惚
けてあれや柔き抱る

狭丹摺ひ明けゆく海を一すぢにいぎ
明をはらむ君が磯辺へ

〔十六日ナ駅ノ斉駅会席上の作のうち〕

、三人こひ右と左に抱けどものこる
一人は抱くすべなし

△、街並木下ゆく我と三階の窓とかた
みに嘲笑を投ぐ

△、乱れざる髪と冷たき手をもてるそ
のかの人も子をば生むてふ

、相向ひ千万年も物いはぬ山のぬくに
あけけりその夜

△、怒る時かならず一つ鉢を割り九百九
十九割りて死なまし

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

手なふれそ我大を病めり手なふれ
そのかれよいざと君を追いゆく

（十六日夜徹夜会席上作）

△、何人も読むことしらぬ文字を我学ばむとして君は来りぬ

、初発の日その夕べより燃えそめし山巓の火ぞ消ゆる事なき

△、砕けたる瓶の破片（かくら）は拾（ども尽きず）国内に散りて遍し

、おどろきぬふと我が前に大いなる赤毛の獣うづくまる見て

△、登りたる人なき山の絶頂に立ちて暗子をふれる人あり

やよ雲雀さはな鳴きそね若草の海に抱きて泣む人あり

△、眠らざる我を焚めざる我とぬて二つの玉を相撃ちてあり

、いと高き際より青き氣一つ我をめざしてましぐらに落つ

我思ふ君が心はいと深しかの杉の葉の度きごとくに

、はてしなき原のも中に埋れたる黄金の牛は堀る人を待つ

、あやまちずまともに君を見るなに我れ天地の正道にあり

、我がどちはいかに寄けど笑らさる玉を寄けり月に日にけに

、千載に一定あるべき大乱を起さむとして君に謀りぬ

△、君が名を常に讃えき洛陽の酒徒に交れる日にも忘れで

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

△、「跨ここに峙れて三節三節みな同じき靴のあとを印せり」(×)

△、「百面の琴の絃みな一様のひびき出すをあやしともせず」(×)

、百年も同じきさまに祭壇の火影うつせり「神」の鏡は

、「皆黒き面かくししてひそ〳〵と行けり借問す誰が隊なるや」(×)

△、「千年まへそのまた千年前ゆくも流れしりの今も流るゝ」

、阻りなく高き柱の二本の根にはさまれて動くあたはず

、岸の木の根につけて流れゆく水のめくにあれるのみなり

石よ石見ればやかなしひたゝの芦辺の波にひる好もなし

△、「胸の中俄かに起る早鐘の千を数へて昏睡に入る」

△、「家といふ都の家をことごとく数へて我の住まむ家なし」(×)

、「東方の博士至来にき山上に粮大あげたる夜の明方に」(×)

灯に迷いこし紫の蛾は死(かちぬ)にぬ窃づかひのゆるき伊手に

、たなびける(野がすみ)ありて面(いりて面び)ありてかへらむる覚めざる人と覚めざる人目よ

△、「白妙の夜着耳環し榊もち神の如くにまぐはひもせむ」(×)

、黛長き人と右手(メニ)のみ大いなる人と胸(メハ)せ我を指さす

ありとある物の味ひなめつくしかく稠小ぬと我先を出す

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

△、蟻の群相いましめて手つなぎに眠れる
手の臂のにの困りぬ

（廿八日）

△、大海にむかひて一人七八日泣きなむ
とすと家を出でにき

△悩といふ杖を忘れて来し人も体外
余じぬ辺れの群（まゐれて）

△泣けといふ人と泣くなといふ人の間に
誰知やさは遠ヒタ泣く

△月と日を空の眼と見てし日より日夜
もれかく安からずあり

△音もなく動きめぐれるかなしみの
海に浮べり鵠の屍 大海津海の目なし路よ
入口しぬ秋の街寺の扉にぞ風ある鑑
たる顔の三人四人に

旋風

△天空に高く舞ひゆく我が帽を仰
ぎて立てり 大風の街 旋風の中

△わが靴は我がきのせて疾駆しぬ二
町許りを君が門より

（二十九日）

△我を見て狂ひて死ねる幾廿女
手ランプをもて暗中を練る

△蒼ざめし大いなる顔たゞ一空に
浮べり夜の大海

△一食の麺麭を割かむとつどひたる
二萬餘人に石つぶてうつ

（二十二日）

小蟻共あかき蚯蚓のなきがらを
日に二尺ほと曳きて日暮れぬ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

百年も眠りて愛めむそのほにも此等
猶且つ我を愛づるや

翼なき人も翼なき人も恋をす
るたゞ国に生れき

「天駈ける鳥を仰ぎて大木を切ら
むと怒る故は知らねど

たへかたき怒りおぼえてわれ額に青
き筋立て先づ君を蹴る

草に臥て思ふ事なし我が額に糞し
て鳥は空にあそべり

「人を見てあはれみをそふまなおしを
せず更にいふ我は恋せず

生れましゆに先づ翼つきられたる我は
ゆゑ我も青空を恋ふ

「流されしならず自ら行きしことありすみ国
の涯の濱にも
（遠き）

「山を千万世の深き所ようさまさむとして洪鐘を鑄る
我鐘を鑄むとす高き山々の千万世（ちまよ）
の眠りさまさむとして

「皆よと呼び五て妹と答へやかてただ死
なむばかりに恋はしにきや

「山といふ山（をくづさば名にとおもしろ）
皆二個の骨見出でぬ

「さしわたし一里にあまる大太敷つく
りて打たむ事もなきほに

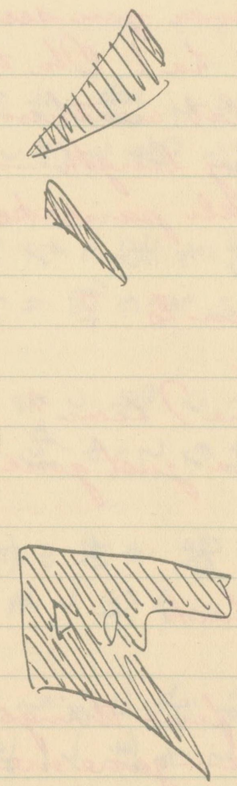
「あなものゝ倦みぬうとまし百年も
眠りてしかるのち仁さあなむ

（二十三日）

「塊の土に変し練りて（泣く母の）
くりきかなしくもあるか
ぬ

「死になむと思ふ夕に故郷の山の緑
ぞ暗にほの見ゆ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20
ガラス使用

Pleschke.

(Coming into the room.) Oh, Lord, Lord, good people! Did ever — did ever you see the like! Good eveniu' — good eveniu', ha! Oh, the devil, the devil! what weather! what weather! I was blown down, I was — all my length — all my length — as flat as a pankke pancake.

Tulpe.

Where have you been to?

Pleschke.

Me? Me! Where have I been? Oh, a long — a long way off. I've just gone the round of Oberdorf

Tulpe.

Brought anything back

Pleschke.

Ay, ay, five things — five things. At the Precentor's — they gave me — gave me — five groschen, they did. And up at the inn

病む人も朱の珠簾塵拂ひ庭に立
たしき春の行く日に

我うゑてある日に細き尾をかりて
うゑて我見る犬の面よし

幻の霞ひく野をよぎるに我が
半生は歩みつきにき

われ一人なきて走りぬ賑へる巷の犬
の吠へて追ふゆゑ

われつねに一人歩みぬ物がこの葬り
の日も遠き旅すも

わが所はすでに全たし死になむと泣
くをきゝつゝ海思ふほど

わが船は積みぬ女人のいつはりを行
の緒に思ける珠数ども

かかやける瞳何見るかの空のその一
ところ渦巻くを見る

醒むる期も知らぬ眠りに入りなむと
枕ならべしそのかの一夜

来む世には泣くといふことなき国に
生れてしかな我ら二人は

人一人えむとするなるゝと小さき願
ひも許りずいつか老いけむ

ふるさとの寺の御廊に踏みにける
小櫛の蝶を夢に見しかな

山たづねそのいたゞきの石の上に父
が黄金の皆見出でにき

故さとの谷の餅に今も猶母が子守
の歌かこもらむ

かく許り熱き涙は初恋の日にも
ありきと死なまくも病む

昨日かく今日かくはたや明日もまた
かからむ我に倦める悲み

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

ふと深き怖れおぼえぬ 昨日まで一人泣
きにしわが今日を見て

見よ今日もかの青空の一方のあなじ
ところに黒き鳥とぶ

はたしと秦の蕃鳴れる故郷の軒
端ぞ恋し秋風吹けば

笑むといふはたゞ泣くといふ世の常の心
に慣れて父となりにき

月明き秋の海辺の白砂に小と高らか
中一人笑ひて笑ひてかなしからけり

日の夜はいとあどけたる己が影を踏み
て笑ひき憂き旅をみて

たゞ一人海に向ひて高らかに歌ふさびしき
人となりにき

生涯の半ばは君にのこりたる半ばは
我につくせむと若し

その初め相見し庭の一本の梧を拾
れざる木とも呼びにき

荒柴なる下り松濱その浜のあかつき
湖に艤せよ

大山風国内の鐘の悪く響おのづから
鳴りぞ出でたる

愁ひ来て岡に上れば名も知らぬ鳥
面めり赤き落の実

いと若き萩の芽にふる紫の朝の小
雨に髪逸はまし

よきものの数にかぞへき新らしき花
も髪こき人妻の目も

ふと路にあひて手をとりあゝしのみ
育ひし人と育ひし人と

春の雨三日ほど降りて萌え出でし
名もなき草も紅く蕾みぬ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

ゆくといふ、寝むといふよし帰らむとつ
ふ更るよしやかて死ぬらむ

幾山川遠き津軽の早御の漱戸を
勝てて我らかつ恋ふ

やごとなき髪のゆらぎに落ちにたる
塔踏み折りしものごりもしき

《二十九日夜 亀夜百首会吟
於千駄谷》

夏三月かたりてつきぬ思出に富む人
なれど銭は持たざり

一人ゐて思ふこと多き夜なるかな
ソたづらに明き月に対ひて

今の世の清女を見まくはろ〳〵と都
にこそは上り来にけれ

恋がたきやよ来て我と闇をひけ
神は一人を忘らび給はむ

今も猶恋に死ぬ人ありかかる大事
は史書に記すべかりける

月夜よしたゞ二柱神ありしその
古への聞けさ思ほゆ

年若き今の世の我も古の老いし
旅人も誇ふるは酒

すでに昔見ずて過ぎけるその人を
最も遠き星と呼びける

近くしてかついと遠し君が目はかの
大空の星に似たれば

美しきもの永久にありとせばかか
る心も死なざるものか

この三年何か我せし泣く人にそがひ
になりて眠るを学びぬ

後の日を語りきそへるけるゐてか
なし我のみ思出をいふ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

望の夜の月のごとくにまどかなるはた靜かなる悲なきものか

誰そと名をとはれて答ふ天地に似るものもなき我に名はなし

雨後の月ほどよく濡れし屋根瓦そのところ〴〵輝くもよし

わが恋をうたがふべくばやがてより代出るそれも不可思議と女出よ

朝来り明るくなるも

よきことか否かかかるはみ心に自ら判じ給ふべからむ

横濱の森に深ふ川二日ほど溯ゆ来て船すてにけり

それもこれも皆君をいふ源に来て今日とけし謎なりしかな

わが家の庭ことごと張かへし日より今年の秋立ちにけり

岩手山秋はふもとの三方の野に満つる虫を何ときくらむ

わが少女鞦韆に乗り日もすがら動きてあれや捉へがたかり

かかる事常にもがもな今日一日為すことなしに心足らへり

その昔揺籃に寝ておまたたび夢に見し人が切になつかし

深きこと我をみつむる少女子の黒き瞳に如くものぞなき

累りたる空の雪を滅茶苦茶に鏡もて定かば奥が降り来む

女、書、煙草、しかして手ごたつのある歌一人あらば足りなむ

門辺なる木に撃ちのぼり遠くゆく人のなを見送りしかな

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

よきことの数にをもて誘へども紫みの
肥をもずむともせず（×）
（紀の著しみ）
かかるをも悲しとせむる心をば君より
得つとゾひて別れぬ

蜂なくそのかたはらの石に踞し泣
き笑ひして一人物言ふ（一握の砂）

人妻の目のうるめるは秋の雨に霧
あるに似ていとどよろしき（×）

かかる目のかかる夕にかかるてとあり
て別ると[illegible]し待ちしならねど（×）

手初めに先が富士山をくづさむと我
が常の子らはかりごとし（我宮君は時やめる花も）

左右よへる方毎見ればむくろ二つ枕な
らべぬ眠るごとくに（×）

時じくに白雲わける谷の底からり
と晴れて琴の音ぞする（×）

天が下とりて代らば先づ君を妃に
せむと誓ひごとしぬ

恋あるは恋に死ぬらむ才あるは才
に死ぬらむすべて死ぬらむ

時すでに熟せりとして天日にまづ
第一の矢を放ちける

少くも君さらくれば草も木も花
咲くほどの心もて思ふ（×）

今も猶君くる毎にしきしまの大和の
国は桜ぞ咲きける

秋のこゑまづいち早く耳に入るか
かる性こそ悲しむべかり（一握の砂）

いつしかに泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか（一握の砂）

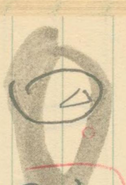
来むせるは霹靂神とも生れ来て
心ゆくまで鳴りて死になむ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

木も草もはた女女子の目の色も花も
異る国に来にけり

音もなく雪ふりくるを大空にまぬ白き
鳥の死ぬやと思ふ



わが思ふ青き青き花いづらにか咲く
らむ君の目にぞうつれる

神さびし七山の杉火のぬく染めて
日入りぬ靜かなるかな

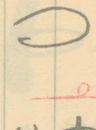
遠方に三度ばかりも鉱なきて夏の
夜明けぬ萱草の原

風浜男は今も昔も浜鳥の五手さし
まく夜にし老ゆらし

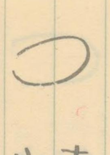
かかる日は白き蛇など来て指をか
めなど思ふうつけたるかな

水たまり落ちゆく空と江の辺と浮べ
ぬ秋雨の後（一握の砂）

まどかなる月の照る夜は靜かにも
萬里が歌を誦しこありなむ



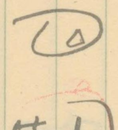
七八度わが咳呻するそのひまに少し
は君の老いたるやいかに



物の屑あつめて焚ける煙さへ天に
のぼれりたゆたひもなく

ある日蒙く年くば猫憂き玉として
掌泣く君を抱き醒る

夜をこめてかくも寝らるもぬ心をば
昔の人も喫きてありけり



しののめの空の下にはおじくにうす
紫のしづくするらむ

明々と月てる大路大跨に歩みて
みたり一人の盲人

二十三ああ我が来しは砂原が印せ
し足の跡めたもなし

大いなる都の中の一室に（にれのみは）なすてもなし死なむと思ふ

汪然としてあお河の悲みぞ我に来れる立ちて舞ひなむ

移怨がるそのやはらかき上目をば愛づとことさらつれなくせむや

幻の鞭のはて急ぐ金鞍の馬あり何の神が鞭ふるか

形あるもの皆しらくだき然る後好む形に作らむぞよき

おもしろし水や空なる太洋の中の一粟我も悪せり

死ぬといふことを怖れぬ男をば大和少女は悪せぬものか（今イカ女ゥ）

夏の雲は青海に似たる大鯨持て来て放て追ひて遊ばむ

汗くさき顔を持て来そ冬にのみ火の唇はぬふべからけり

春の雪はむらに残る山路を青幌したる馬を一つ来ぬ

「孤子ののぼるが如く雄々しかる我が若人は毒を出で来ぬ

浅緑くゆる木の葉に三日月の眉めくほどに思いそめてき

故もなき怒りをおぼゆかかること漸く多し怒り死なむぞ

今日も我不思といふ度のなき渦に臨みて身じろがずあり

同かげとわが悲みと天地に普き秋の雲となりにけり

我の空廓寒をして影もなし遊めたる人の心にも似て

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

幻の宿にうつれる春の日のかかやきに
見しうすき暮るよ

すでに十日風吹きやまず誰そ風の袋
の裂目つくろひて来よ

風の神右咲呼して揉みへりぬこの時
木々を抜きて風吹く

ねむの木の木がげの風の甘きごと
甘き暇りにハりき二人は

壁よ壁此をうてばてつくと何ん
なき音立てにけり

誰やかた知らぬ少女と向日葵の実
を噛みくだき誰かたらしぬ

きりきりすこそ細るなり月明き
雲和の窓のその外面より

人すまぬ館の隅の古井戸に常に
薄黄の煙立つとふ

日の本の女ことごとわがものの様に見
へる若人をみぬ

わが寂の裏のわかの浅き水すこしぬ
るみぬ春立つらしき

首少しふりて申さく天人にあらぬ限
りは腹も減らうず

わが笑を君の涙にけしゆきて剰す
ところはいささかもなし

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

九月

（五日 觀潮楼歌會）

かなしきは秋風ぞかし世すがらも恋
れねし人を思ひにけり 稀なる夢 湧きし泡のしいにちかく

かりそめに忘れても見まし石畳
春生ふる草に埋るるかごと

一人なくそのたのしみな帰らむといふ
までありといひて別れぬ

かかる森なかりくるは誰を高らかな歌る
たゞ青き雪を軽りつつ

紫のにほへる衣なかさねたる裳こそ見
よげよりけれ

かりそめに草の名ききし人ゆゑな今
日も我来つここの草山

暁秋の空の下にて向日葵の実をかみ
くだき物語りしき
（せなとる）

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

夜の風眠るとしもなきうたゝねのわが
裳の毛をなでて吹く

（十二日平野宅 ~~[illegible]~~ 徹夜會）

故さとの空遠みかも高き屋に一人の
ぼりて愁ひて下る

朧夜の庭を埋めて梨の花降りしきる
下に瑟瑟ひきにけり

木蝋の白菓さけるとが下る葉しかせ
中用ふるまで

たゞ一人独山にしとほり鍛かげる鍛
木小鳥は物いひて来る

手なふれそ毒に死なむと君のいふ
花ゆゑ敵て手ふれても見む

試みにいとけなき日の我とちり物
いひて見む人あれと思ふ

秋の辻四すぢの道の三すぢへと吹きゆ
く風のあと見えずかも

今日のみの君の日ひくし少しだる早く
な撞きそ寺々の鐘

古人の歌の聖も嘆して見けむかか
くも傾く月は

鮫として玉を欺く少人も秋来と
いへば物思ひぞする

しかいふは菓など浴けむ瓶にしも
入りねと強うる君が心か

啄木鳥は何の鳥ぞも千代かけて
歓楽山の山の辺に住む

置洋燈手をきし舌をきすとみて
うたたねさめぬ夜ぞ更けたんな

樗の木ふと物いひぬ啄木鳥よさは
な啄きそ我の腑の辺

ほのぐと明けゆく庭に天雲そ流れ来れる白梅の散るも

神無備の杜のほとりの杜鵑今もそ啼かめ古へのごと

夜の鳥夜毎に来啼く森近に家しぬればや寝らえず夜頃

喋木鳥の木つつく音を心あてに君をたづねて森ふさ迷子

はてもなく砂うちつづくゴビの路に住み玉ふ神は怖ろしからむ

久方の天なる雲の白妙の家ゐ誰そ泣く秋風ふけり

世の初め先づ森ありて半神の人そ加中ゐ火や守りけむ

小さきことを幸とすべけむ庭潦それゐ溺れて死ぬ人もなし

そを読めば愁知るとふ書焚けるは人の心よろしも

みナのくの涯には来ぬれ藤の葉の下に家する人もあらなくに

さら〳〵と雨おち来る庭の面のぬれゆくを見て深こすれぬ（一掻の砂）

草摺の衣よろしもろち繋る草に似し日の心おもほゆ

日高見の国つ高原おほらかに東白すらし雞（風方に）啼く

花の下わが名呼ぶ子をあなかまといひて臨け来ぬ物忌の日に

掛（こそ）春の玉（みなこ）（なれ）もくれ子ゐの綿衣きておよすげ給ふ

一枝折り二枝折りて三枝の梅折ると来ば菓鳥の木ゆ

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

○ 神さぶる国に生れて青牧の笠見るまに女になりぬ（文）

○ わかさむてと世み尽きてあはれかく日毎物をば思へるものか（一握の砂）

○ 心のなべてうらはかなげに暮れゆきぬとりとめもなき悲みの日は（一握の砂）

○ 大方の物の噂きは知りはてし心今なより何をまねばむ（文）

○ 空の色視むる日あらば刷毛をもて塗れよと海は青き水湛へ

○ 風こそは物よく知らめ万人の眼さへ入りつもり吹くなれば

○ 春の夜はものをまつかしはらくも大数油に栖ぶるも

○ 白き星しら〳〵降るやさにあらずあけぼのの空旅もれてとぶ

○ 夜の空の黒きが故に黒といふ色と均れぬ我の色かとも

○ 朝霧の中に啼ふ鳥の声よりもややさやかにぞ思ひ入りぬる（文）

○ 人いまだ生れざりける日に水素酸素をこりて水成れりけり

○ 万代も動かぬ山も時ありて夜空に泣けり嵐吹ふも（文）

○ いと高き空ふる住まばやはととぎす夜もさやかに先づ駈かむたち（文）

○ 習はじとしてれあるべきことまでも君にならひぬつれるさまでも

○ たやすくも思ひそめつれかにかくに別れ難んず事もなげには

○ 同じかる事とおもはむ悲みの尽きずもあれば泣くも泣かぬも（文）

国立国会図書館　タイトル『暇十時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20　ガラス使用

生死の危き日ぞと雑念をすけてひたすら君思ひ病む

時雨降る如き音して不伝ひぬ人によく似し樹の猿ども

よよと泣くことしも知らでいつしかに年は重ねぬ悲しと思ふ

（十四日―十五日）

秋立つは水にかも似る洗はれて思ひことごと新らしくなる

父のごと秋は厳めし母のごと秋はなつかし家もたぬ子に

秋風は寝つつかきかむ音に遠く悲みの珠を枕にはして

来るといふに先づぞ人をば驚かす秋は尊し豫定者のごと

（けさかき山の木）

倒るる時遠き都に雷のごと響きおくれと大木に教ふ

寒すると死ぬとは同じ生くるてふことにつかれて求めしなれば

国になれし山にはあれど秋くれば神や住まむと畏みて見る

長安の壮児も騎らぬ荒馬に駿る危うさを常として寒ふ

ひとりてふことは美しかつかなし悲しき時は能かず泣くゆゑ

古の大き帝もあるいたえび恋せりといふ我も然せむ

理にとべる鳥のごとくに放たれて思はむといふよしとしてきく

おのが時くるとやうるも高歌して秋を迎へぬ物思ふ人

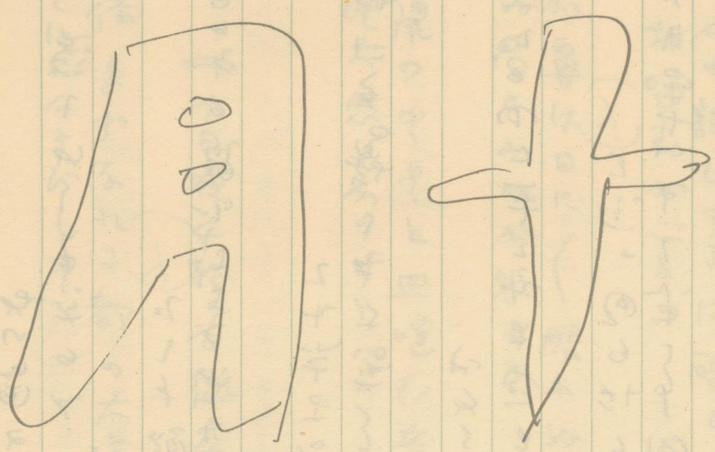
国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

人みなの泣く時に泣き笑ふ時笑ふ
を恥として我黙す

一片の玉を掌におけば玲瓏として秋
来る その光より

若き日はかへることなし燭をませば
も象ばむと大玉泣くも

灯を消せば夜光る玉ところせにあり
て光れり我の夜の庭



国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

（十四夜午後六時発行）

[illegible]

（十五日朝七時発行）

[illegible]

ただ一つのみを信じ
生きてゐる

○

からだを動かす事に
よつて
精神の
平衡を
保つ

○

ちよつと
風邪をひく
事を
喜ぶ
ような
気持

○

ふらふらと
出かけて
行きたい
ような
日の
ゆふぐれ
には
君のことを
思ふ

寒しさうな
すすきの
穂を
見ると
なぜか
涙が
出る

なぜと
聞くと
神に
祈るような
気持に
なる

はかない
夢から
さめて

彼女の
ために
祈つて
やる
気持に
なつた

あきらめの
境地から
なつた
時は
また
新しい
希望が
湧く

自然の
美しさに
注意を
ひかれる
時

ふと
淋しい
気持に
なる
時

幼き
時の
事を
思ふ
時

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時 : 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20　ガラス使用

貧の月 大煙突ゆ渦巻ける煙の末に淡くかゝれる

陰山の玉に研ける劍よりするどき舌は何に研ける(×)

音もなく雪ふりつもる冬の秋の思ひに猶ちやかなれども(×)

秋来れば恋ふる心のいとまなさ秋もいぬがてに一夏く聞く(×)

香油もる珈琲の署に春の風吹けば涯立つがほどにも(×)

港所とろろとなきて輪を描く鳶を壓せる潮影りかな(×)

その昔よみしことある小説にかかれし如く帰る路かな(×)

美しき薔薇を包む靄と見ば見よげるもありそれの面帕(×)

ふつふつと妻が額にわき出づる汗をかぞへて暑き夏かも(×)

枯の風 負夜ひびきぬ人とはぬ山の祠の石馬の耳に(×)

うら枯れて わびしき前哉にささと時雨の音も添ふころ(×)

夜ひるなく胞の鳴る聴くかかるをかあはれまことに恋ふるといふらむ(×)

埋れし玉の如くに人しれず思へる程の貴とかりけり(×)

一夜夢よく泣く人を手にまきて寝がてに明けしをかしき夜かな

白もすがらほほゑむ人と夜もすがらよく泣く人と二人要うむ

ほこりかに人に語りて恥とせぬ浅き恋をも見習ふものか

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号 本別8-20
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号　本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』　請求記号 本別8-20

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』請求記号 本別8-20
ガラス使用

金星会名簿

○ 小樽区南浜町四丁目一大家支店内
紫苑 大倉少太郎

○○○○○○ 岩手県二戸郡浄法寺村
孤舟 小田嶋治兵衛

○○○ 青森県南津軽郡山形村
丹羽撃太郎

○○○○○○○○○○○○ (十五円納) 大阪府三島郡高槻町
天野 境田弘吉

○○ 台湾基隆義重橋街七四
静洋 河野

○○ 下総国船橋町九日市一八一
琴堂 川奈部良三

○○ 鳥取県岩美郡大岩村大字岩本
浪人 橋浦泰雄

国立国会図書館　タイトル『暇ナ時：歌稿ノート』　請求記号　本別8-20
ガラス使用
別8
20

国立国会図書館　　タイトル『暇ナ時 ： 歌稿ノート』 請求記号 本別8-20

ガラス使用